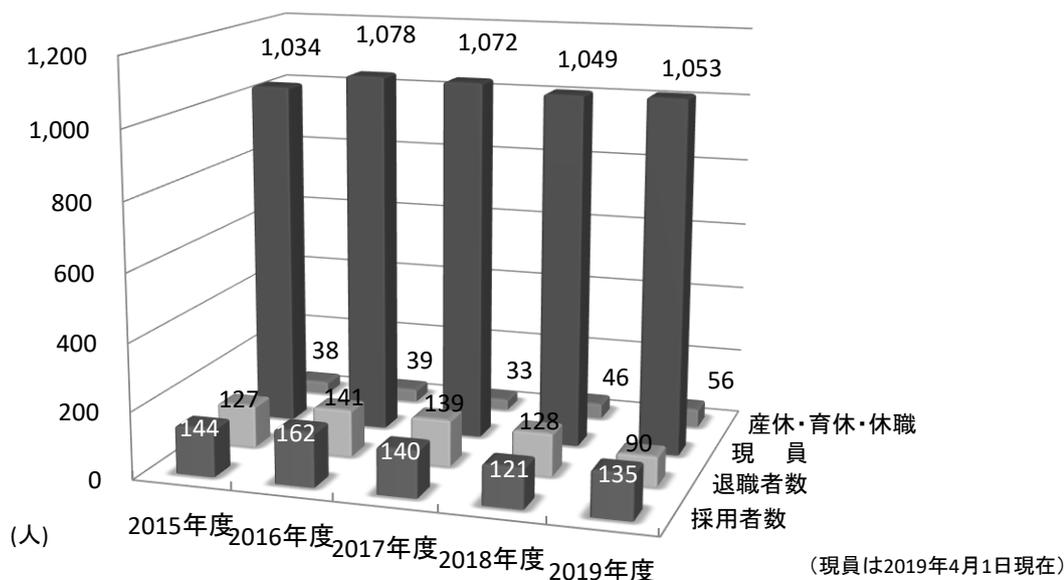


34 看護部

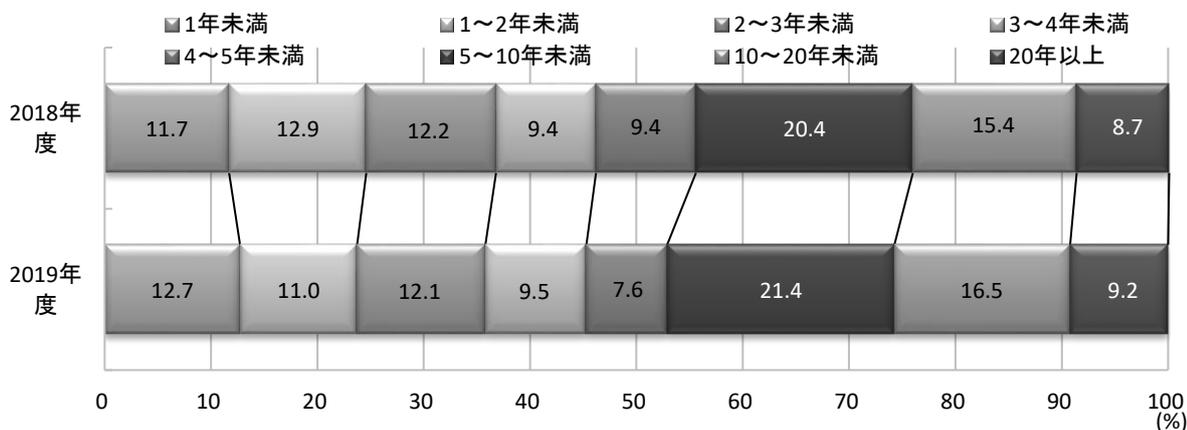


看護部は“SWEET”【S(sincerity)：誠実な行動、W(warm)：あたたかい対応、E(evidence)：根拠ある実践、E(ethics)：倫理的感性、T(technique)：確かな技術】をモットーに、看護職員一人ひとりが自己の役割と責任を果たすべく看護業務に取り組んでいる。看護職員の確保・定着に努めることで退職率は8.5%まで低減でき、産休・育休を取得して働き続ける職員も年々増えている。(図34-1, 34-2)。重症度、医療・看護必要度において、A項目は急性期医療・処置(ME機器の装着、管理、モニタリング等)を、B項目は患者の生活支援状況(動作制限や認知度による介助等)を、C項目は手術等の医学的状況を評価している(図34-3、34-4)。患者の観察度、自由度(図34-5、34-6)からは重症患者が年々増加してきているものの、依然として全病棟で常にB項目の点数が高く、日常生活援助に多くの看護力を費やしている状況である。特定機能病院の7対1入院基本料の施設基準である「重症度、医療・看護必要度Ⅱ」の判定基準28%以上を維持するためには、医療処置を必要とする患者の増加への取り組み、また、生活支援が主たる患者の早期退院(在宅・転院)が必須となる。入院前、入院時から退院支援に取り組み、当院での医療処置が終了した患者がスムーズに退院できるよう、医師、メディカルスタッフをはじめ、地域の医療関係者との連携を強化していく。さらに在院日数の短縮により、医療処置・ケアニーズの高い患者が外来へとシフトしていることから、在宅療養指導や看護外来の充実を図り、患者支援強化に向けた取り組みを継続している(表34-7)。今後も入院前から退院に向け、積極的に介入し、継続看護の更なる質向上を目指す。

34-1 看護師数の年度別推移



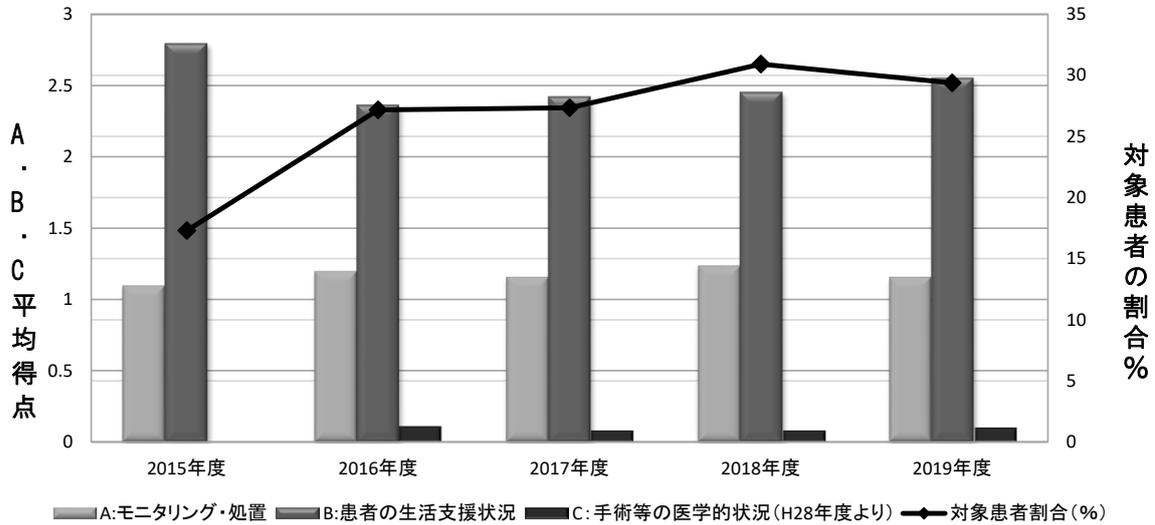
34-2 看護師当院在職年数別の年度別構成比率(各年度4月1日現在)



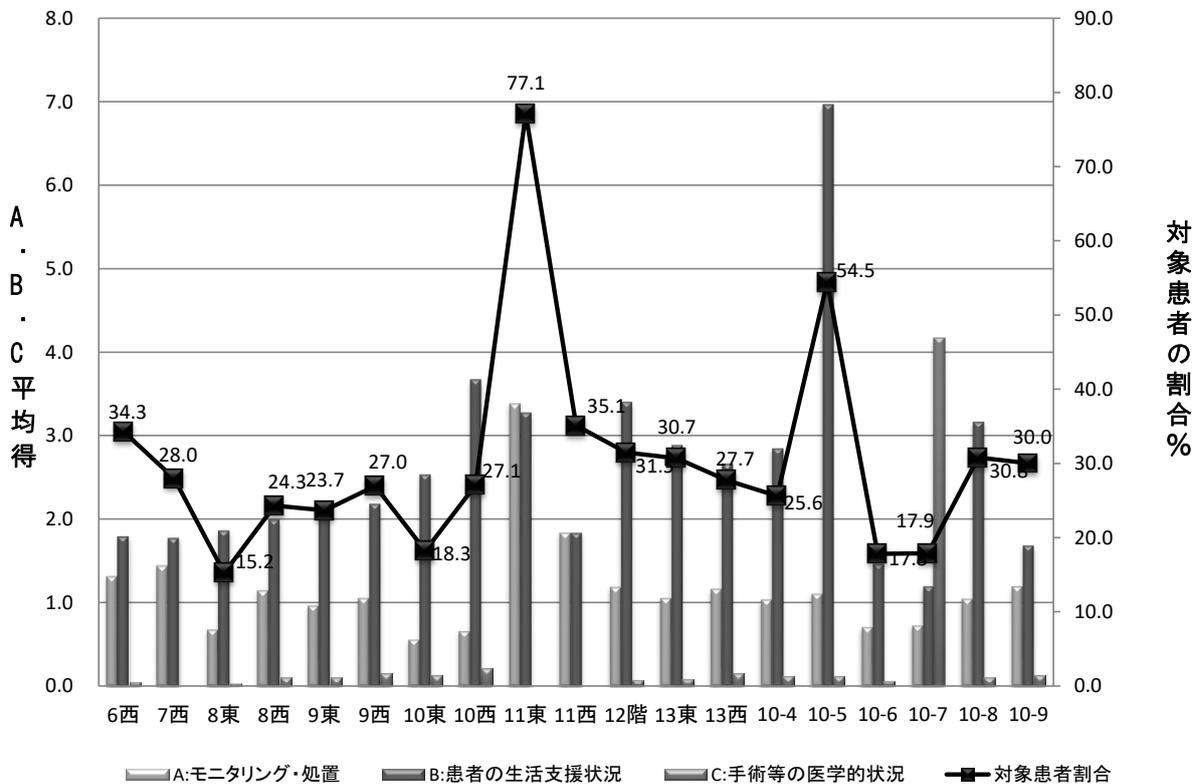
34-3 7対1対象病棟における重症度、医療・看護必要度平均得点の年度推移

- 対象患者
- ・A得点2点以上かつB得点3点以上
 - ・B項目「診療・療養上の指示が通じる」又は「危険行動」に該当する患者であって、A得点が1点以上かつB得点が3点以上
 - ・A得点3点以上
 - ・C得点1点以上

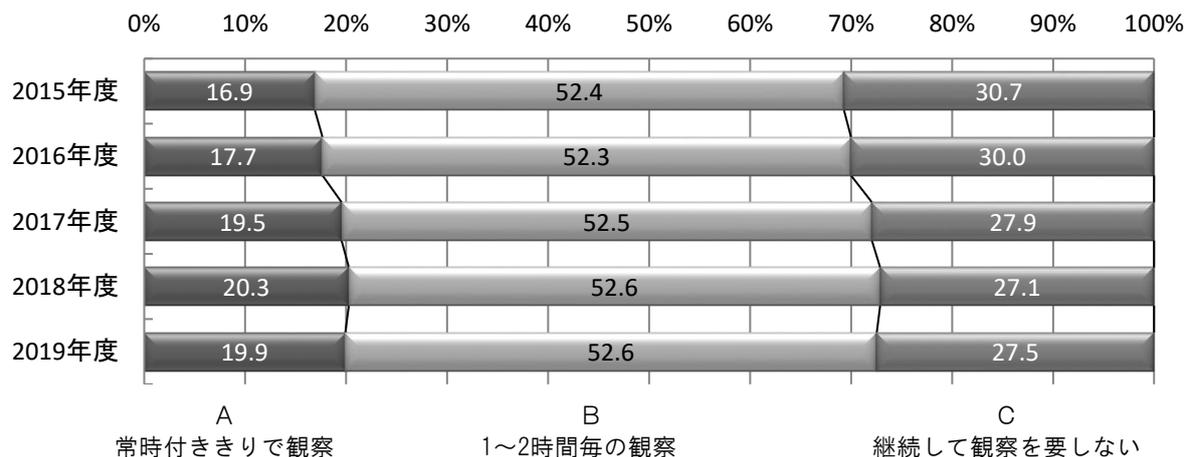
※2016年度診療報酬改定により項目の変更、C項目の追加あり。
 ※2018年度診療報酬改定により項目の変更、対象患者の基準の変更あり。



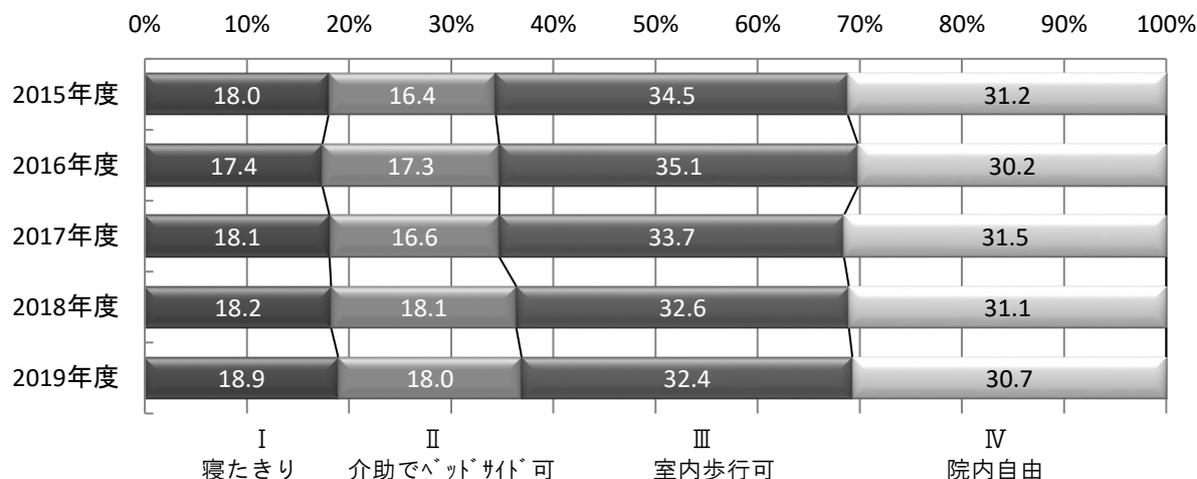
34-4 2019年度 7対1対象病棟別重症度、医療・看護必要度 項目別平均得点および対象患者割合



34-5 看護観察度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-6 生活の自由度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-7 年度別外来看護活動状況

(件)

区分		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
療養指導	在宅療養			692	2,337	3,922
	自己注射	678	803	1,071	1,128	1,088
	自己腹膜灌流	5	11	3	9	5
	酸素療法	64	155	147	110	73
	人工呼吸			13	96	177
	中心静脈栄養	4	5	16	51	55
	成分栄養経管栄養	19	14	454	203	63
	自己導尿	43	60	80	51	49
	糖尿病透析予防			302	144	163
	がん化学療法			33	75	59
看護外来	造血幹細胞移植看護			96	225	586
	不妊症看護	-	-	-	-	76
	フットケア	521	497	595	715	749
	糖尿病看護			454	464	453
	慢性病看護			257	228	526
	子ども看護			13	51	11
	がん看護			589	944	191
	周術期看護			124	132	91
	リンパ浮腫	141	116	219	163	205
	ストマケア	1,127	955	1,125	1,030	1,072
	母乳外来	152	138	164	92	100
マタニティヨガ	92	78	82	38	51	
合計	3,029	3,056	7,397	8,287	9,765	

※2017年度より表記方法変更

※2019年度より不妊症看護の項目を追加